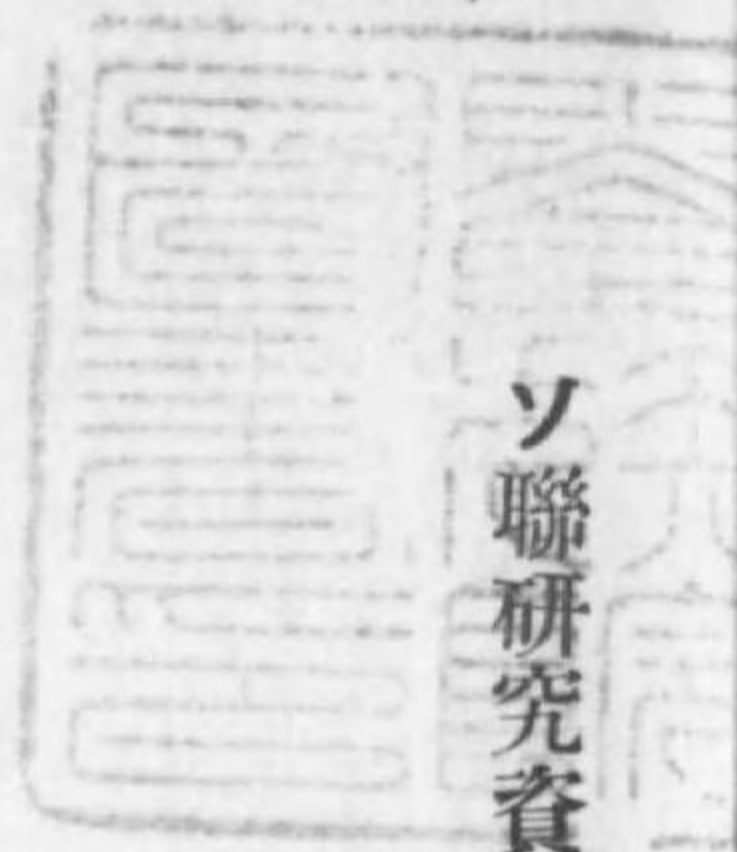


始



ソ聯研究資料第三號(昭和八年七月)



ソ聯第一次五箇年計畫の軍事的意義

極秘

滿鐵經濟調查會

ソ聯第一次五箇年計畫の軍事的意義

目次

一、世界大戦の経験と五箇年計畫	一
二、國防と五箇年計畫との關係	二
三、戦時に於ける軍需品の供給保障	四
四、軍事工業中心地の移轉	四
五、軍事輸送線の整備	二〇
六、軍國化の手段としての五箇年計畫	二五

ソ聯第一次五箇年計畫の軍事的意義

一、世界大戰の經驗と五箇年計畫

ソ聯第一次「五箇年計畫」の眼目は、國家の工業化に存してゐる。蓋し國家の工業化の如何に重大なるかは、世界大戰の經驗が如實に其れを語つてゐる。現代に於ては確固たる軍事經濟の基礎無くして戰爭を行ふ事は不可能である。國家が戰爭を行ふには、自國內に軍事工業の基礎の存することを必要とする。これ無くして戰爭とは到底考へられないことである。

さて今まソ聯の工業化を、軍事的見地より見るに當つて豫め考慮すべきことは、それが、通常の經濟學の見地より見る場合と異なつた標準を持つ點である。

純經濟學の見地よりする時は、第一次五箇年計畫は、生産品原價の低下及び勞働賃銀の増加と云ふ點に於て、豫定の標準に達せず、又その上に生産品の質をも低下せしめた爲め、成功したとは云へないであらう。然し、純軍事的見地よりする時は、生産品の質

二
の不完全と云ふ事は、第二義的のものに過ぎない。軍事工業に於て、第一義的意義を有するものは、生産の量的方面であつて、質的方面ではない。世界大戦は、明かに、生産價格も、高率の労働賃銀も、また或程度までは軍需品の品質までもが、重大意義を持つものでない事を示してくれた。一度軍需品を購入するとなれば、有らゆる交戦國は算盤を度外視して、桁外れの支出を惜しまなかつた。労働賃銀は、戦線に多數の労働者を送り出した爲生じた労働力の激減の結果として、昇る一方であつた。生産品の品質が、其數量増加に對する犠牲として、悪くなつて行くのも止むを得ない次第であつた。例へば、火藥への色々の要求が著しく低められ、複雑な仕掛の時限信管が、簡単な普通信管に替へられた。砲彈の品質に對する要求も低下し、平時では不良品として物議をかます如きものすら、受け渡しせられた。總じて戦時にあつては、軍需品の品質如何は第二義的問題で、數量が最大の意義を持つことになるのである。

二、國防と五箇年計畫との關係

今ま第一次五箇年計畫財政案を見るに、總支出額八六〇億金留のうち工業地建設及び

其組織の爲に割當てられる額は約半ばに達する。即ち、工業（電力建設及び連絡に關する特別クレジットを含む）に約二一〇億、運輸方面に九五億、國防及び行政に約一〇〇億、合せて四〇〇億留となる。而して此の四〇〇億留が取りも直さず、ソ聯國防費の謎を解く關鍵であることは、ソ聯陸海軍人民委員ウオロシロフが共産黨第十五回大會の席上で述べた言に徴しても明白である。

彼曰く「吾人は最大の速度を以て重工業の發達をはからねばならぬ。蓋し、重工業は最短期間内に、ソ聯の經濟力及び國防力を高め、經濟封鎖を受けし時と雖も、發展の可塑性を與へるであらう。」

更に彼は翌年の第十六回大會にも此事を反復強調して居る。曰く「第一次五箇年計畫に於ては、工業の最速なる發展に對し最大の注意を拂ふべきである。蓋し工業こそは戦時に於ける國防及び經濟的耐久力を最もよく保障するものである」と。ウオロシロフの言は明かにソ聯軍部當局が第一次五箇年計畫に課する使命を示すものである。而して其使命とは、ソ聯が完全なる封鎖を受けても、尙ほ且つ戦争を續行していけるような軍事工業を急速に建設するといふ使命である。世界大戦の經驗によつて明かなる如く、現代の

戦争は武力の戦争であると同時に工業力の戦争である、如何に多数の軍隊を擁することも戦時軍需品の供給にして不足ならば、軍隊は其力を發揮すること出来ない。

夫故に第一次五箇年計畫と軍事的方面との關係を知る爲には、軍需品の供給保障と云ふ見地に立つて検討せねばならぬ。

三、戦時に於ける軍需品の供給保障

戦時に於ける軍の需要は平時に於けるそれに比して、非常に増加する。世界大戦の末期、即ち一九一六年ロシアは、戦線に約七〇〇萬の軍を有してゐた。但し之れにはロシア内部に於ける二〇〇萬人は計算されてゐない。此数はソヴェート聯邦の人口一億五千萬の六%を占めるに過ぎない。従つて戦事的緊張と云ふ見地よりする時は未だ充分な緊張を示してゐない數である。

それにも拘らず、之等の軍隊に對する軍需品を保障せんが爲には、ロシアの工業力は全く不足を告げ、外國へ莫大の注文を發するの止むなきに至つた。

戦争酣なる時—例へば一九一六年—のロシア軍の軍需品の五分の二は、外國註文品で

あつた。一九一六年の軍需品總額四十二億五千萬金留の中、四二%、即ち十八億金留は外國よりの軍需品に對して支拂はれた。金額の點より云へば、外國註文品の中、四分の一は被服方面、三分の一は軍事技術方面、約半分は銃砲方面に割當てられた。

註 一九一六年度の注文總額中には、一九一五年度の國內工場に對する歩兵銃、機關銃の注文は含まれてゐない。統計は、ソヴェート・ロシア、中央統計局陸軍統計部の出版になる「世界大戦中のロシア」(モスコ、一九二五年)から引用した。

今また大戦酣なる時に於ける、ロシア軍の軍需品の總納入量、並に總納入量のうち外國注文の占むる割合を表示すれば次の如くである。

軍需品の種類	一九一六年一月一日より一九一七年七月一日に至る一年半の間に於ける要求量		一九一六年一月一日より一九一七年七月一日に至る一年半の間に於ける實際納入量		總量に對する外國品の割合
	總量	其うち外國品	總量	其うち外國品	
一、技術的關係					
オートバイ	一萬四千臺	一萬臺	一萬臺	一〇〇%	
針	七十一萬噸	二十八萬噸	二十一萬噸	七八%	
無線電信用器	二千臺	一千二百臺	五百四十臺	四四%	
自動車	一萬九千臺	五千臺	二千臺	四〇%	
探照燈	九百臺	八百六十臺	二百五十臺	二九%	

電線	六十八萬軒	五十六萬軒	十一萬五千軒	一一〇%
二、航空關係				
飛行機	五千臺	一千八百臺	四百臺	二二%
三、被服關係				
鞍	三十三萬五千個	十三萬五千個	九萬個	六八%
外套用羅紗	六千三百萬ヤード	二千五百萬ヤード	一千三百六十萬ヤード	五一%
保護色羅紗	六千三百萬ヤード	二千五百萬ヤード	五百三十萬ヤード	二二%
編上長靴	六千三百萬足	二千七百萬足	五百八十萬足	二二%
四、砲兵關係				
各種小銃	九百十萬挺	六百三十萬挺	四百五十萬挺	七一%
各種小銃	三萬五千挺	四萬三千挺	三萬挺	七〇%
各種小銃	八十五億發	五十一億發	二十八億發	五五%
火藥	九萬噸	六萬五千噸	三萬五千噸	五三%
輕砲	四千七百萬發	五千三百萬發	二千七百萬發	五二%
四・二吋砲	九百八十門	五百九十六門	二百二十八門	三八%
口徑八以上の重攻城砲	三百十一門	百十五門	四十三門	二七%
野戰榴彈砲	一千二百五十二門	一千一百九十五門	三百門	二五%

本表は特別國防會議記録から引用したものである。

右表に依つても明かな如く、一年半の間に爲された注文は、唯だ機關銃、及び輕砲彈を除くの外は、皆な要求量を充たしてゐない。而も機關銃にせよ輕砲彈にせよ、その七割、五割は實に外國工場の製作にかゝるものである。

今ま若し、戰爭の全期間を通じてロシヤ軍への軍需品納入量を調査するならば、國外よりの輸入が如何に重要な役割を演じたかを一目して知り得るであらう。例へば之れを砲兵關係に就いて見れば次の如くである。

戰爭の全期間を通じて實際にロシヤ軍に納入せられし砲兵關係の軍需品 (註)

軍需品の種類	戰爭の初期よりの納入總量	其うち外國品の割合	全體に對する外國品の割合
重砲用彈丸(八以上のもの)	十一萬發	九萬發	八〇%
重砲(八以上のもの)	十七萬七千門	十三萬四千門	七二%
機關銃	六萬七千挺	四萬二千挺	六三%
大砲	七萬三千噸	四萬六千噸	六三%
手榴彈	三千三百八十萬發	一千九百萬發	五六%
小銃	一萬三千噸	六千噸	五〇%

小銃	六百萬挺	二百九十萬挺	四八%
小銃彈	六十三億發	二十四億發	三八%
中口径大砲(四一六)	三千四百四十一門	九百四門	二六%
輕砲用彈丸(三)	五千三百九十萬發	一千二百六十萬發	二四%
手榴彈用爆發藥	三千三百五十萬個	八百十萬個	二四%
時限信管	四千六百二十萬個	八百二十萬個	一八%
中口径大砲用彈丸(四一六)	九百九十萬發	百六十萬發	一六%
輕砲(三)	一萬三千五百八十一門	五百八十六門	四%

八

註 一九二五年北米合衆國財政部發行「世界大戰中ロシヤへの軍需品供給に關する記録集」により前ロシヤ砲兵司令官レイホブイツチ中將が調査したもの。

最後に、大戰の全期間を通じロシヤ軍に送られし諸種軍需品に於て、外國品の占める割合を表示すれば次の如くである。

軍需品種類	全體に對する外國品の割合	軍需品種類	全體に對する外國品の割合
飛行機	八五%	靴	三五%
自動車	七五%	織物製品(主として羅紗)	三〇%

毛皮	七〇%	有毒性化學製品	二五%
獸皮	五〇%		

註 一九二五年北米合衆國財政部發行「世界大戰中ロシヤへの軍需品供給に關する記録集」により前ロシヤ陸軍中將ゲルモニウス氏が作成したもの。

大戰當時ロシヤは軍需品の注文以外に、自國の軍事工業用金屬類の輸入をも必要としてゐた。即ち一九一六年十一月八日の特別國防會議の記録に據れば、黑色金屬の輸入要求量は毎月六〇〇萬ブードを下らなかつた。別言すれば、戰時ロシヤに於ける黑色金屬年不足額は一〇〇萬噸以上に達したわけである。

有色金屬の不足はそれ以上にひどかつた。元來、大戰前に於てもロシヤの有色金屬需要量の三分の二は外國より輸入せられたもので、ロシヤの有色金屬年總需要量十五萬一千噸のうち、國內產出高は僅かに四萬七千噸であつた。殊に、ロシヤでは、錫、ニッケル、アルミニウムは全然產出しなかつた。鉛の國內產出高は需要量の僅か二%、又、亜鉛の國內產出高は需要量の四分の三であつた。因に内國亞鉛の六〇%は西部ポーラン

九

ドに産し四〇%は北カフカズに産した。また銅の國內産出高は需要量の七分の六であつた。

大戰の始まると共に、有色金屬に對するロシヤの需要は急速に増加した。一九一七年六月、金屬供給委員は外國品供給管理局に對して、大戰時に於ける有色金屬需要量を、戦前のそれに比して二倍となすべき事を要求した。其結果、平時に於ける十五萬一千噸の需要量は、二十六萬三千噸に増加した。

殊に銅の需要量は二倍半に、又アルミニウムの需要量は三倍に増加した。眞鍮、アンチモニーに對する需要量も異常に増加した。アルミニウム及び錫の需要量の全部、鉛の需要量の九八%、銅の需要量の七〇%以上、亞鉛の需要量の半分（ポーランドを失つたが爲に）も亦た外國よりの輸入に俟たねばならなかつた。之等の數字は、世界大戰の經驗を如實に物語るものとして、現在も尙ほ大なる意義を有してゐる。また之等の數字が誇大でないこと云ふ事は、それが一九一七年三月、ロンドンに開かれた聯合國の會議に於て、精密に計算せられたものである事によつても明かである。従つて、之等の數字は、疑ひも無く、戦時のロシヤに於ける有色金屬必要量の最少限度と見るべきである。

此外ロシヤは、爆發藥製造に缺くべからざる硝石の全量を外國より輸入した。（註）

註 エヌ、デ、サアヴィチ氏著「國防會議回想記」の中の統計に據る。

戦時には、アンモニヤ電氣酸化に依る人工硝石製造も企てられたが、之れではとても間に合はず、其上、生産價格が非常に高いものについた。そこで廉價な水力電氣による窒素酸化法で以て、空氣中より硝石を製造する爲め、オロネツク縣の瀧の所在地に硝石工場を建設することとなつたが、何分之れも亦た茫大な水力電氣の設備を必要とするので、延引を餘儀なくされ、一九一七年の革命まで完成を見なかつた。空氣中より硝石を得る事業は、第一次五箇年計畫にも含まれてゐるが、此事業の内容は極秘に屬する爲め其成果を知ることには出来ない。

上述の表及び大戰時の金屬類需要量に關する資料よりして明かな如く、羅紗、鞍、長靴、火藥等を除き、軍需品の大部分を占めるものは實に冶金工業品であつた。

然らば第一次五箇年計畫は冶金工業品の増産に就いて如何なる計畫を立てたか。先づ黑色金屬方面を見るに、最初の案では、第一次五箇年計畫の末期に於ける其生産高は次表の如く増加すべきであつた。

一九一三年度の生産高		第一次五箇年計畫の末期(一九三二年—一九三三年)の生産高(註)
鉄	四百二十萬噸	一千萬噸
鋼	四百二十萬噸	一千萬噸

註 之れは第一次五箇年計畫の最初の案であるが、現在では之れは約二倍に増加してゐる。即ち鉄鐵は一千七百五十萬噸に、鋼鐵は二千萬噸に増加してゐる。

計畫は計畫として、さて實行の方はどうかと云ふに、此黑色冶金工業は、決して第一次五箇年計畫の豫定通りには進展してゐない。即ち一九三一年のソヴェート側の資料に據れば、鉄鐵の年産額は約五百萬噸、鋼鐵の年産額は約五百五十萬噸であつて、第一次五箇年計畫の末期に於ける黑色冶金豫定生産量の半分にしか當つてゐない。

さればクイブイシエフは大いに此點を慨し、一九三一年六月二十四日のモスクワ共產黨員に對する演説の中で、「南方地方の鑛鑪の面積は一九三〇年四月には一萬八千立方米であつたが、一九三一年四月には一萬九千立方米に増加した。即ち約5%の増加である。然るに奇怪にも鉄鐵の生産高は一向に増加しない」と叫んでゐる。

次に有色金屬の方面を見るに、最初の案では、第一次五箇年計畫の末期に於ける其生産高は一九一三年の生産高に比して、次ぎの如く増加すべきであつた。

一九一三年の生産高	銅	三五	鉛	一・四	亜鉛	一〇・五	合計	四六・九
一九一三年の消費高	銅	四一	鉛	六〇	亜鉛	三九	合計	一四〇
一九一六年(世界大戰中)の消費高	銅	九〇	鉛	七四	亜鉛	三〇	合計	一九四
第一次五箇年計畫の生産高	銅	八五	鉛	三八	亜鉛	七七	合計	二〇〇

假へ第一次五箇年計畫の生産高が、大戰當時の消費高と一致するにせよ(五箇年計畫の豫定生産高は二十萬噸であり、大戰當時の消費高は十九萬四千噸である)、銅に關して第一次五箇年計畫が、大戰當時の消費高の九四%、また鉛に關して五〇%を與へるに過ぎないことは、上表によつて明白である。

茲を以て、戰時消費を重點に置く中央指導部は、一九二九年の春、有色金屬生産高を

三十七萬七千噸（此うち銅は十五萬噸、鉛は十萬噸、亞鉛は十二萬七千噸）に増加する案を立てた。第一次五箇年計畫の最初の案と比較すると、銅に於て殆んど二倍、亞鉛に於て一倍半強、鉛に於て三倍近くの増産である。

而して之等の數字は既に戦時の消費高を完全に充たすものである。尙ほ之等の數字を大戰前のそれに比較すれば、銅に於て約四倍半、亞鉛に於て二十八倍、鉛に於て六十倍の増加である。

斯くて、大戰當時に於ける黑色及び有色金屬消費高の統計と、第一次五箇年計畫の使命とする所とを對比すれば、ソ聯の所謂「工業化」の徂ふ所が那邊に存するかは、軍事工業の専門家を待たずとも一見明白である。

四、軍事工業中心地の移轉

世界大戰は、敵國の空襲に對して軍事工業を保護する必要あることを教へてくれた。戦後、飛行機の威力益々加はり、其空襲範圍は絶へず擴大しつゝある。現在のところ飛行機の空襲範圍は約五百軒である。換言すれば、國境地帯五百軒以内の土地は敵機の襲

撃を受ける危険性を有してゐる。然し、何分にも飛行機發達の速度は極めて迅速なるを以て、來るべき十年間に此危険地帯が少くとも、二倍に擴大すると考へることは、決して誇張ではない。斯くて、空襲に對する絶對的危険地帯は國境に沿ふ五百軒の地帯、また比較的安全地帯はそれに接する五百軒の地帯と云ふことになる。ソ聯にとつて、軍事上最も重要な國境は、バルチック海より黒海に至る對ヨーロッパ國境であるが、此方面に於て空襲に對し絶對的危険地帯と目さるゝは、ボログダアーツウエールブリヤンスクーポルタヴーエカテリノスラブアゾフ海のベルヂヤンスクを貫く線の以西である。此地帯は完全に敵國の空襲に任されるであらう。

次に比較的安全地帯は上記線以東から、ニジニー・ノウゴロード・タアムポフーツアライツインの線以西である。

最後に、絶對的安全地帯は、ボオルガ地方、カフカズ地方、ウラル地方、中部アジア地方、シベリヤ地方である。

ソ聯に於ては、比較的安全地帯に、モスクワ、ハリコフ、ドンバスの三工業中心地が

あり、絶對的危険地帯に、レーニングラード、キーエフ、オデツサ、クリイヴオロジイ
エ（鐵鑛）等の工業中心地がある。

世界大戦當時、百六十四萬人の労働者が之等の工業中心地に活動したが（此の百六十
四萬人と云ふ數は當時のロシア労働者總數の四分の三に當る）、之れを地方別に分けれ
ば次表の如き割合となる。

地 方 名	軍事工業に使用せし労働者數
A、絶對的危険地帯	
レーニングラード地方	一四・四%
エカテリノスラブ地方	七・一%
オデツサ地方	三・九%
キーエフ地方	一・二%
B、比較的安地帯	
モスクワ地方	四三・〇%
ロストフ地方	三・〇%

地 方 名	合 計（註）
ハリコフ地方	一一・三%
C、絶對的安地帯	
ウラル地方	一四・六%
ニイジエゴロド地方	四・〇%
シベリヤ地方	二・六%
カフカズ地方	一・六%
合 計（註）	九七・七%

註 不足せる約二%はソ聯よりバルチック沿岸地方に移りしものにあたる。

即ち労働者の數より見て全軍事工業の四分の一強は、絶對的危険地帯に、四分の一弱
は絶對的安地帯に、而して残りの二分の一は比較的安地帯にある。

更に之れを主要生産部門別に見れば、次表の如くである。

地 方 名	冶金方面	化學方面	電氣技術方面
絶對的危険地帯 ペテルブルグ—キーエフ—オ デツサ—エカテリノスラヴ	三七%	五〇%	三%



事實、絶對的危險地帯には軍事工業労働者總數の四分の一が働いてゐる。而して其うち冶金工業には三分の一強、化學工業には二分の一働いてゐる。而も、絶對的危險地帯に於ける軍事工業の主要部分に働く労働者の大部分(労働者總數の四分の一)は、國境より僅か數十軒しか距つてゐないレニングラードに集中されてゐる。國防工業中には、陸海兩省直轄の國營工場と等しく私營工場も亦た含まれてゐた。而して國營工場の労働者數及び生産高は、私營工場に對して僅か一二%及び八・八%に過ぎなかつた。尙ほ國營工場の三分の二はレニングラードに、三分の一はウラル及びボルガ地方に設置せられてゐた。最後に國營工場の生産高を部門別にして示せば、冶金方面が八〇%、化學方面が一九%、電氣技術方面が一%の割合であつた。

第一次五箇年計畫は大戦の經驗及び大戦以後の戦法の發達に鑑み工業設備に根本的改革を加へた。即ち先づ工業地を絶對的安全地帯に設けることにした。

斯くて黑色金屬七大工場のうちウラル—ニジネタギルスキー、バカリースキー、マグニトゴルスキー、シビルークズネツスキーの四個は絶對的安全地帯に設けられた。因に之等四工場の銑鐵年生産高は百六十五萬噸にして、ソ聯銑鐵年總生産高の約二〇%と見られてゐる。

また残り三個のうち二個は比較的安全地帯と目さるゝエカテリノスラヴ(ドネプロベトロフスク)に存在し、一個は、國境を距たる二五〇軒のクリイボロジャに存在してゐる。最後の工場は、クリイボロジャ地方埋藏の鐵鑛開發の爲め止むを得ず、其處に設けられてゐるのである。

現在ソ聯石炭總産額の四分の三を生産しつゝあるドンバスは國境を距たる六五〇軒の地に位してゐる。別言すればドンバスは比較的安全地帯にある。そこで第一次五箇年計畫は絶對的安全地帯たる西部シベリヤのクズネツ炭田を開發し、ドンバスと同様のものを作らんとしてゐる。クズネツ炭田の次にはカザクスタン(キルギス)に於けるカラデンスキー炭田の開發が豫定されてゐる。カザクスタンにはまた、有色金屬の開發も豫定

されてゐる。之れを要するにソ聯の冶金工業の根據地はボルガ東岸地方、及びウラル地方に移される事に決定したわけである。

最後に、自動車工業に就いて一言しよう。元來、自動車工業は従前ロシアに存在しなかつたものである。然るに第一次五箇年計畫によつて、始めて絶對的安全地帯たるボルガ地方に自動車工業根據地の建設を見た。即ちニジニイノブゴロド及びヤロスラウリに自動車工場が、又ウラル、及びスタリングラードにトラクター工場が建設された。尤も此外尙ほ國境から六〇〇軒距つてゐるハリコフにもトラクター工場が一個出來たが、之れは新興建設に全く恵まれないウクライナへの讓歩と見るべきであらう。

五、軍事輸送線の整備

近時の「戰略的」鐵道は世界大戰前の其れとは全然行き方を異にしてゐる。大戰前に於ける鐵道は軍隊の迅速なる集中を主要目的としたが、今日では軍隊輸送の代りに軍隊への供給の問題が一層重要となつた。然るに軍隊への供給が圓滑に行はれる爲には工業地方の鐵道網の整備及び工業地方より國境地方に至る輸送線の整備を必要とする。そこで

第一次五箇年計畫はヴォルガ東岸地方、ウラル、西部シベリヤ方面に鋭意鐵道を建設することとした。

即ち一九三一年度に於ては、ウラル、カザクスタン、西部シベリヤに於て二千軒の新線及び一千軒の複線の敷設が計畫された。之等の鐵道は中部ロシアの鐵道網と連絡するものである。尙ほ既に開通を見た「トウルクシブ」―西部シベリヤ、トウルケスタン連絡幹線―の目的とする所は、中部アジアの棉花を中部ロシアに供給し、シベリヤの穀物を中部アジアに供給せんとするにある。またウラル地方の鐵道建設計畫は、冶金工業の中心地のウラルへの移轉、有色金屬中心地のキルギジャへの移轉、西部シベリヤのクズネツ炭田の開発と密接な關係を有してゐるのである。

次に鐵道以外の道路の建設に就いて第一次五箇年計畫は如何なる計畫を立て、ゐるかを見よう。周知の如く、現代の戰爭に於て、自動車の重大性は益々加はりつゝあるところ、實に自動車は戰闘方法に關する從來の觀念を根本的に變改せしめたと云つても決して過言ではない。而も此自動車の活動が道路に依存してゐる以上、道路網の建設も亦

た軍事上至極の必要事であらねばならぬ。

抑々ロシアに於ける道路建設は、領域の廣大、人口密度の稀薄に因り、常に隣接西歐諸國よりも遅れてゐた。十九世紀後半の鐵道建設熱は、ロシアの道路の發達を一層停滞せしめてしまつた。其上、ロシアの舗裝路は軍事上の考慮の下に、全部ポーランドに集中してゐた。従つてポーランドの獨立と共に、ソ聯の領域内には舗裝路は全然存在しないこととなつた。ソ聯現在の道路總延長は七十二萬五千軒であつて、アメリカ合衆國の七分の一に當り、歐羅巴第一であるが、領域の大を考慮に入れ、之れと相對的に見る時は零に等しい。今まソ聯の輸送道路網の密度を示せば、次の如くである。

輸送道路網の密度比較表

國名	百平方軒に於ける輸送道路の延長(單位軒)	百平方軒に於ける舗裝路の延長(單位軒)
ソ聯	三・三	〇・三
ポーランド	一六・八	一〇・〇
ルーマニア	三〇・二	一八・五
北米合衆國	六二・七	一一・五
フランス	一二九・〇	一一五・〇

上表に依つて明かなる如く、ソ聯に於ける輸送道路網の平均密度はポーランドの五分の一、ルーマニアの九分の一、北米合衆國の約二十分の一、フランスの四分の一にしか當つてゐない。若し夫れ舗裝路の比較に至つては、ソ聯はポーランドの三十三分の一、ルーマニアの六十分の一、北米合衆國の四十分の一、フランスの四分の一といふ情ない有様である。

尤も比較の際ソ聯の北部及びシベリヤの無人地帯は當然控除せらるべきだから、實際はソ聯の輸送道路網の密度は遙かに大であると考へられるが、それにしてもロシアの道路建設は世界中最も遅れたものと云ふ事が出来る。

そこで第一次五箇年計畫は、此缺陷を除く爲め、現在の輸送道路網七十二萬五千軒を百七十萬軒に、即ち殆んど二倍半に高めることとした。因に此際軍事上最必要と考へられる地方に建設の主力を注いだ。又軍事的に見て最重要な舗裝路網の建設に留意し、夫れを現在の四萬一千軒より四十萬軒に、即ち十倍に高めることとした。詳細は次表に明かである。

ソ聯道路網現状と第一次五箇年計畫による増加表

現在	五箇年計畫の末期に於ける豫定	増加割合
砂利なし路—九千軒	二十三萬軒	二十五倍
砂利路—一萬軒	九萬軒	九倍
舗装路—二萬二千軒	八萬一千軒	四倍
	(此中、小石舗装路—三萬六千軒 アスファルト舗装路—四萬二千軒 高級舗装路—三萬軒)	
計 四萬一千軒	四十萬一千軒	十倍
普通道路總延長—六十八萬四千軒	百三十萬軒	二倍弱
輸送道路總延長—七十二萬五千軒	百七十萬一千軒	二倍半

上表のうち特に注意すべきは、アスファルト舗装路の割合の高いことであるが、之れは軍事上大なる意義を有してゐると云ふのは、アスファルト道路は、小石舗装路に通有な埃をあげると云ふ事が無いので、空中からの觀察を困難ならしめると云ふ特長があるのである。

最後に、道路増加に關聯して附言すべきことがある。それは、之等の道路網上に、有力な自動車廠が設けらるゝ事である。

第一次五箇年計畫によれば、一九三二年以後のソ聯の自動車關係の年産額は、自動車十七萬臺、トラクター八萬五千臺、オートバイ一萬二千臺となるが、若し此計畫にして實現するとせば、一九二八年に於て僅か二萬五千臺の自動車、三萬五千臺のトラクターを有したソ聯の自動車廠は、五箇年計畫遂行後には、二十六萬六千臺の自動車と、二萬三千臺のオートバイを持つこととならう。

六、軍國化の手段としての五箇年計畫

以上述ぶるところによつて明白なる如く、五箇年計畫は其プログラム中に、多分の純軍事的使命を藏してゐるのである。成程、一般世人の云ふが如く、第一次五箇年計畫は唯だ單に生産品の量的向上のみをなしとげ、其質的方面には見るべきものは無いかも知れない。又此計畫は財政的破綻を招來するかも知れない。然し何れにせよ唯だ獨裁政治下に於てのみ可能なる此の世界未曾有の尨大な計畫が、ソ聯の大軍國化に重大な役割を

演ずるものであることは、一點疑ひの餘地無いところである。

昭和八年七月十五日印刷
昭和八年七月二十日發行

編輯兼南滿洲鐵道株式會社經濟調查會
發行人 貴 島 克 己

印刷人 大連市東公園町三一番地
吾 妻 力 松

印刷所 大連市東公園町三一番地
滿洲日報社印刷所

發行所 南滿洲鐵道株式會社

終